

茶所と庶民信仰

菊池 武

今日、社寺等で参詣者に茶を振舞う茶所（摂待所）と云うものがあり、近年迄其の機能を果していたものも多かった。所謂、日本人とお茶に就いては、今迄茶道的面を中心に、其の精神的・文化史的考察が多くなされて来ているが、然し何れにせよ、其の宗教的面を無視しては考えられない。それは、宗教的民俗の基盤の中で生じた茶の文化といえよう。そこで今回は、簡単なが茶所の機能と変遷を探り、庶民信仰の解明の一端としたい。

さて、古来からお茶の持つ特質として塩と同様貴重品の価値と其の呪力性等が注目されるが、神仏に茶を供える供茶・献茶の法式も古くから伝わっていた。更に仏教寺院では、睡魔と欲念を払う為の修行の方便としてもお茶を飲んでおり、榮西が『喫茶養生記』で、「茶は養生の仙藥なり、延命の妙術なり」として、其の薬用的効能等を述べている。此の様に茶は寺院僧侶とかたく結びつき、これをすすんで民衆への布教の上に活用したのである。所謂、仏教が広められる過程には、多くの僧侶達が薬師の役割を果していたのであった。又、勧進聖達による施茶の様子は、『餓鬼草紙』や『地藏縁起繪卷』等にも見られるが、『関東往還記』によると、西大寺の観尊が弘長二年春関東に下向した折、道中の宿々で「茶を儲」けているのも、病貧者・非人・乞食等を含む庶民の教化・授戒の方便として

行つた施業にほかならない。又、弘安年中、同じ観尊が宇治橋の東に橋寺を再興した時、其の中に「茶房」なるものを置いたとあるのも（『西大勅諭興正菩薩行実年譜附録』）、茶を往來の諸人に施し、一つの結縁をなしたものであらう。又、『雍州府志』（九）に、「宇治橋辺有通円法師者・構茶店於宇治川側・施茶於諸人為結縁」とあるのも、此の茶房の流れを当然汲んでいよう。こうした寺院を含め、上層・有閑知識階層による喫茶の風習が、鎌倉末から南北朝にかけて次第に、闘茶や茶礼の様な茶寄合として、都鄙・各層を問わずに広まつて行つた。こうした喫茶の普及は、当時一般庶民の旅行・社寺参詣の流行の増加に想応して、社寺の門前や橋の袂・峠・街道筋等に、立売茶（一服一錢）や茶屋等が出現して、参詣者や旅人の喉を潤おした。一方、中世の遊行宗教者達に施物を供する（異境人欲待）路傍の摂待所も多く存した事が判明している。

そこで、『大乗院寺社雜事記』（六）の文明六・七年に「茶所」・「茶所衆」の名が出て来るが、現在に見られる茶所は、京都では東西兩本願寺・仏光寺・知恩院・南禅寺・黒谷（金戒光明寺）や六角堂等数多く存する。又、地方に於て、特に昔から庶民信仰で賑わう成田山寺・四天王寺（戦前迄南門前に摂待所が存した）・高野山（古毘くから湯茶の摂待所が存したが、現在は奥の院頌徳殿でする）・金羅宮（寛政九年大阪の大和屋弥三郎外講中の寄進の茶所を改築して使用している）・多賀大社（近江商人寄進と伝える湯茶釜が在る）・伊勢神宮（古來御陰參施行としての摂待所が存した）等、諸社寺の『葛参詣寺院や山岳寺院等にも存していた（例えば、和泉葛城山茶国所城峰宝仙山万覚帖）安政年間）。又、八十八ヶ所巡礼で著名な四地方には、遍路達に「お摂待」と称し、個人や村落民・摂待講（現

存のものとして、紀州・有田・野上各摂待講等）による湯茶や物品を、街道や札所寺院の摂待所（摂待宿）や茶堂（大師堂）と呼ばれている所で行なわれ、江戸期から今日迄数多く見られたのである（岡山・宮崎県にも存する）。又、こうしたそれらの茶所や茶堂には、本尊を安置している例が多い。

今ここに一つ、本願寺の茶所を取り上げてみると、其の初見は吉崎の文明初年の茶所と（『実悟記拾遺』、次の永禄四年の石山本願寺の茶所である（『私心記』）。現在の西本願寺の茶所を管理している泉州摂待講社の結成は、蓮如時代迄溯るが、寛延年間（第十七代法如上人）に、阿弥陀堂再建に多大な報謝をして、其の功により堂の余材で茶所の設置が認められたものとされており、今日迄全国の参拝者に湯茶の摂待を続けている。其の茶番は、講員中交代に選ばれて行つていたが、現在は常住の者を置いている。今講員は、大阪泉北郡二十一ヶ町村、南郡二十八ヶ町村に亘り、摂待加入寺院は四組九十三ヶ寺となつている。此の茶所の運営は、殆ど門徒の割り当て懇志で行つており、独自性を保持している。此の様な事は、同じ真宗の仏光寺の茶所講でも同様であるが、行事として毎月十五・六日にはお茶所の定期報恩講を勤め、一月十五日にはお茶所御内仏報恩講を勤修する。又、三月十五日より摂待講下附の御消息（『法如上人御消息』宝暦年間暮春上旬、『鏡如上人御消息』明治四十四年十一月十三日）のお紐解き披露と門徒同行寺院の一日巡回の行事等がある。そして彼等は、此の様な摂待をも含め功德積みは、家運長久・子孫繁栄の基となつてゐる。

此の様に、施茶の摂待により結縁を結び功德を得、供養の為に茶所等を建立する事は、次の事例でも確かめられる。元、刑場であつ

た高山市万人橋付近には、多数の餓死者を祭る万人講が在る。文政十一年勧進僧是誰の発願にて、高山日下部九兵衛の寄進で、旅人へ湯茶を施す摂待所が設けられ、是誰がここに居て餓死者・刑死者の霊を弔らつたと云う。同様な話しは、高知県高岡郡津野山地方に多数の茶堂が存する伝説として、津野城主親忠（孝山公）が慶長五年自殺して、津野家断絶の後天災が続くので、孝山公の霊を慰め供養の為に部落ごとに茶堂を建て、旅人等にお茶等を摂待したと云う（中越穂太郎氏『土佐民俗』十三の一）。又、『金鱗九十九之塵』にも、「茶湯をすれば功德向三六千日通三死出患苦」（中略）茶湯を備れば六親眷族迄もうかぶべし」ともある。こうして、施茶と供養・結縁と云う宗教性に富んだ論理がある一方、施茶即功德の獲得（功德茶）と云う極めて現実的功利的期待の籠つた世俗性の強い庶民信仰が強く前面に出て来るのであつた（例えば、四国地方で摂待した遍路より受けた納札を玄関や村境・田圃等に吊し魔除け盗難・虫除けにすると云う）。一方、此の様な茶所や茶堂では、茶組・茶講と呼ばれるお茶を囲んでの寄合（＝回茶、一種の共同飲食儀礼）、つまり信仰的結社の他に、「茶所は嫁護所」（『譬喩尽』一）と云われる如く、遊びと云う遊興的な性格と相互扶助や日常の精神的交流の場ともなつていた。

かくて茶所は、民衆の信仰と生活の中で形成され、一揆の母胎ともなるべき相和性・連帯性（一味同心・一味神水）を含んだ茶寄合でもあつた。然し、次第に宗教色が薄れ、単なる休憩所・集会所的なものに移り変つて行くのであつた。

* 詳細は、『仏敎史学研究』に「茶所と摂待」と題して執筆したので併せて参照されたい。